

岡崎むかし館通信

vol.4

<http://www.libra.okazaki.aichi.jp/16000.htm>

むかし館活用事例や郷土学習のヒントなどの情報を発信します。



むかし館の回転ステージ上の道具は、季節により入れ替えを行っているのを御存知ですか？今年は長い期間「夏の道具」が活躍しましたが、11月になり、ようやく肌寒くなってきました。回転ステージ上も「冬の道具」を登場させましたので、ぜひご覧ください。

むかし館のあれこれ

ー 活用・教材化へのヒント ー

< 「扇」のなぞと文化を探る >

むかし館の「岡崎の祭り」コーナーでは、六ツ美地区の御田^{おたおうぎ}扇祭りをはじめ、市内の主な祭りを映像で見ることができます。

さて現在、御田扇祭りを再調査しており、改めて「田扇」について考えてみます。この祭りでは、伊勢神宮から扇を御神体として受けてきて、神輿に入れて、各地域で受け継がれていました。この扇にどのような意味が込められているのでしょうか。折りたたむことのできる扇は、平安時代中ごろ日本で発明されたといわれています。それ以来、日本人は扇を便利な道具あるいは手段として使ってきました。

岡崎に見られる御田扇祭りの「扇」は、豊饒^{ほうじょう}の扇として位置づけられると思います。伊勢神宮の神田で行われる御田植初めでは、竹扇を持った10人の人々が東西に分かれ、植えた苗を扇いでイナゴを払う動作をします。岡崎の御田扇祭りもこの意味が込められていたと思います。このような豊饒の扇とは別に、祈る扇、飾る扇、はやす扇、贈る扇、人生儀礼の扇など様々な用途があったようです。

扇^{うちむ}の「縮」機能は、日本人の感性の豊かさから生まれたものと考えられます。日本人が掛け軸や絵巻物を好むことや、庭園の設計などにも、日本人の「縮」志向が表れているといえます。【N】

(補足:『世界大百科事典』第2版より抜粋)

「扇」：扇子ともいう。扇ははじめ涼をとるためのものであったが、のちには威儀にも用いられた。現在いわれている扇とはいわゆる折りたたみのできる形のものであるが、もとは団扇形式のものから生じた。



御田扇祭りの御神体扇



御田扇祭りの大団扇(堤通り手永)

< 常 夜 灯 >

今回は、名もなき人々が自分たちの生活を守ろうとして奉納した「常夜灯^{じょうやとう}」を取り上げてみようと思います。常夜灯とは、夜道の安全のため、街道沿いに設置されているものは、今で言う街灯及び道標^{みちしるべ}(道路案内)のような役割を果たしているものが多いです。豊橋の吉田港にある江戸時代の常夜灯は灯台の役割をした大型のものです。また、集落の中心や神社などの常夜灯は信仰の対象として設置されているものが多いです。

八帖町の諏訪神社の境内に一基の常夜灯が神社正面の鳥居の右手に建っています。比較的大型で、「秋葉山」の常夜灯です。秋の字の偏が火で作りが禾です。これは、火災にあわないようにと信仰を集めていた静岡県秋葉山を信仰の対象として秋葉参りが盛んに行われるようになった結果作られたものです。岡崎においては、寛政期(1789～1801)以降盛んになりました。この秋葉参りは、各村で講を結成し、代表者がお参り(代参)して、札を貰い受けてくるのが一般的でした。このことが盛んになるにつれて、道中の安全と村の安全を願うために常夜灯が集落の中心や神社に作られました。

諏訪神社の常夜灯は、「願主 上野村」「安政四年(1857)」とあり、さらに台座の一番下の部分に「願主上野手永村^{てなが}」と掘られています。これより、個人の奉納ではなく、村全体しかも一村ではなく手永(享和2年=1802年では37ヵ村)全体で奉納していることがわかり、大変貴重な資料といえます。

時代とともに常夜灯の明かりも菜種油からろうそく、そして街路灯は電球から水銀灯へと変化し、私たちの安全を保っています。今一度、学区にある常夜灯の数と設置されている場所、どのような願いが刻まれているかを調べなおしてみると新たな発見につながると思います。【N】



諏訪神社(八帖町)の常夜灯

現在開催中の企画展では、高度経済成長期の日本を象徴する「東京オリンピック」「大阪万博」などの資料も紹介しています。当館ホームページで案内している貸出道具のリストに未掲載の道具でも、可能な限り貸出対応いたします！どうぞご相談ください。

●編集/発行(隔月) 岡崎市立中央図書館・企画班 平成25年11月
〒444-0059 岡崎市康生通西4-71 tel.23-3167 / fax.23-3165

開催中!【企画展「楽しみの世界～レジャーの時代到来!」～12/10】

次回展示【企画展「くらしの道具—今と昔—⑧灯す」12/12～3/11】